

# おわりに——未来を切り拓く古典教材へ

山田和人（同志社大学）

最後に、本書の母体となった研究会とその活動について、本書成立の過程について、紹介したいと思います。

## 活動について

古典教材開発研究センター・コテキリの会（古典教材の未来を切り拓く！研究会）は、教育の現場から古典教育・古典教材のあり方を問い直すことを目指しており、それぞれの教育現場に偏在する実践知をみなで共有することで、未来を切り拓く古典教育・古典教材の可能性を探っています。

活動は、二〇二〇年度に科研費基盤研究（C）「興味関心を喚起するくずし字や和本を用いた新しい古典教材の開発に関する実践的研究」（代表者 山田和人）をベースにスタートしました。二〇二〇年九月にコテキリの会を立ち上げ、二〇二一年一月に同志社大学古典教材開発研究センターを開設したあとは、春と秋の二回、研究会と研究会を開催しています。

古典教育の現状について、小学校・中学校・高等学校・高等専門学校・大学など、校種を超えた意見交換の場を作り、それぞれが実践している、学習者の古典への興味や関心を喚起する教材開発や授業の方法について意見を交わしてきました。教員だけではなく、図書館司書や美術館・博物館学芸員による古典への興味を引き出す取り組みも紹介し、書写など教科を超えた担当者の報告も交えてきました。現代の古典教育に求められていることは何なのか。古典と現

代をつなげて考えられるような教材や授業実践のあり方とは何なのか。この活動の成果をまとめたものが本書です。

### 本書成立にいたるまで

学習指導要領の改訂に対応しつつ、教科書のあり方の変化をも見据えた意見交換こそ必要であり、現代の古典教育の現状を離れてしまつては、議論は始まりません。議論の中で、現代の古典教育には、古典の魅力を伝えていくための新しい工夫が求められていることに気づきました。教科書の枠にとどまらない古典教材を開発し、それを共有したり、交換したりすることや、実際の教育現場で使用できる古典教材と、それを活用した授業実践を共有できる教育プラットフォームの構築などが求められています。

いま、古典教育への新しい切り口として、和本やくずし字を用いた新しい教材が注目されつつあります。そこで、新学習指導要領に記された「伝統的な言語文化」、「言葉の由来や変化」にも通じる、和本やくずし字を用いた古典教育をセンターでは実践していくことにしました。

和本は子どもたちにとっては未知との遭遇の場であり、何が始まるのかという期待感を抱かせます。読むことができるかどうかだけが問題ではなく、現代の書籍とは違う和本の質感や形態も含めた多様性にふれることで直観的に先人の知恵に気づきます。この存在感は圧倒的です。和本を使った出前授業などでは、子どもたちの様子がいきいきとして実に面白いものです。

和本やくずし字を用いた出前授業では、グループワークやワークショップを積極的に行っています。普段見たり、ふれたりできない古典籍のリアルさを実感しながら、グループでの解説と読解を多角的・多層的に展開させていきます。未知の世界を垣間見る体験とも言えるでしょう。そこでは、くずし字をメンバーと協働して解き明かしていく喜びがあります。まさに深い学習をもたらすことを実感できます。自分自身の修得した知識やスキルを活かして、くず

し字の解説・読解に取り組むことで、学習者の主体性や協調性を育むことができるようになります。その意味で、和本やくずし字を用いた授業は、新学習指導要領でも推奨されている「主体的・対話的で深い学び」に通じるものがあり、アクティブ・ラーニングに最適の教材とも言えます。

しかしながら、和本やくずし字に関心のある授業者が取り組もうとしても、教材として使用できる和本がなければ、実践することができません。そこで、和本を教室で使用できる貸出システムがあれば、学習者が和本に直接ふれることができるようになり、古典との距離感を近づけることができるのではないかと考えました。そのために古典教材開発研究センターでは「和本バンク」として、和本の収集・整備・貸出システムの試験運用を始めました。和本バンクを活かすためには和本に関する基礎知識を要領よく学ぶことができる取扱説明書のような解説も必要でしょう。和本やくずし字についての知識をもっていない授業者にも試してもらえるように、本書にもその一端をまとめています。

また、近年、国文学研究資料館、国立国会図書館、早稲田大学、立命館大学ARCなどが古典籍のデジタル画像を積極的に公開しており、画像データの教育利用の可能性が飛躍的に拡がりました。その上、くずし字学習支援アプリKULIAやAーくずし字認識アプリ「みを」などが学習支援ツールとして後押ししてくれます。Aー認識の精度が上がるほど、使える教材のカテゴリやフィールドが広がるとともに、古典の言語文化の裾野を拡げることにも貢献できようになるでしょう。Aー任せになってくずし字学習のスキルアップにならないのではないかと危惧する方もおられるかもしれませんが、むしろ、Aーを適切に使うことで、世界が拡がり、多様な価値観と出逢うことができる教育効果の方が大きいのではないのでしょうか。Aー技術は、グローバル社会における新しい言語文化の教育を切り拓く可能性があります。Aー認識による解説は、学習者の読解の力を強化もしてくれるでしょう。それによって、学習者に生涯学び続ける勇氣と希望を与えてくれる方がうれしいことです。

ただし、デジタル画像を活用して教材を作るのは、多忙をきわめる教育現場ではなかなか難しいというのが現実で

す。そこでセンターでは、授業者がくずし字教材に関心を持った際に、授業の流れに応じて比較的短い時間で学習できる教材、学習者の学習環境に応じて選択できる多様な教材を提供・共有できないか検討しはじめました。

日本語教育の分野ではこうした教材をモジュール教材と捉え、教科書のような学習のステップを重視するカリキュラムから独立した、柔軟な学習教材を開発しています。「通常の教科書が順序を無視して使うのが難しいのに対して、学習者のニーズが新たに生じたその時点においてそのニーズに合わせた形の活動を実施するような使い方を可能」(岡崎敏雄『日本語教育の教材』アルク、一九八九年)にする教材として流通しています。

くずし字や古典籍を使用した古典教材を、一〇分、二〇分、三〇分単位ぐらいの所要時間を意識して開発していくと、授業の中で自由に使用できる可能性が高くなります。四〇〜五〇分授業を単位として教科書や指導書の多くは作成されていますが、何か新しい試みを通常授業に組み込む場合は、使用する局面に応じて最適のモジュール教材を選択することで、授業の流れを阻害しない、むしろ、その流れをドラマティックに演出できるかもしれません。そうした教材提供のあり方を考えることで、学校の授業で実際に利用できる教材となる可能性が出てくると考えました。国語教育にとどまらず、書写、美術、図工、理科、数学、体育などの教科においても、多様な古典に親しむことができる機会を提供できます。

また、こうしたモジュール教材を提供する「教材データバンク」から、授業者が自由にダウンロードして授業で使うことができるようになればと考えました。そのため本書はオープンアクセスにして、誰もが自由にダウンロードできるようにしています。生涯学習や海外の教育現場での利用も視野に入れていきます。古典の魅力を多面的、多層的に伝えられる「教材データバンク」が夢物語ではなく、実際に運用できる時代を迎えようとしています。授業者だけでなく、古典への興味や関心を持った学習者がアクセスして、古典への理解や鑑賞に取り組みといったような、学びの可能性を広げることもなっていくかもしれません。そうなれば将来の日本文化の継承者を育成することにもつな

がっていくのではないでしょうか。

### 日本近世文学会の出前授業

「教材データベース」において古典教材が共有され、利活用されるようになることで、古典教育の現場が活性化する可能性も拡がります。また、教育現場でこうした和本やくずし字を使った授業を現場の教員だけで実施しなければならぬのかと言え、そうではありません。授業時間外の学習において、学校外の授業者の支援を求めることも一つのやり方かと思えます。

例えば、日本近世文学会では学会独自に「出前授業」を行っています（74頁参照）。古典籍の専門家が和本やくずし字のプリントを用意し、関連経費は学会が提供しています。「新学習指導要領」でも「社会に開かれた教育課程」の必要性が述べられており、社会との連携及び協働を目指す方向性が示されています。その意味でも、こうした出前授業を積極的に活用していくのも現場の負担軽減や、古典の深さを伝える一つの方法と考えるのもいいのではないのでしょうか。

### 古典は過去・現在・未来を自由に引き来できるタイムマシン

本来、古典や古典籍は過去・現在・未来をつなぐタイムカプセルであり、自由に引き来できるタイムマシンでもあると言えます。広い意味でわれわれの文化遺産であり、大げさに言えば人類の共有すべき（したくなる）世界遺産だと私は捉えています。そして、文化遺産を文化資源として活かしていくことで、従来の枠組みを超えた、新しい文化遺産を生み出す可能性が生まれていくのではないか。古典は、日本と海外、学校と地域、社会と教育、あるいは研究と教育をつなぐコミュニケーションツールでもあり、生涯を通して学び続ける喜びを生み出してくれる磁場のようなも

のでもあると考えています。

古典教材は使用されて初めて意味のある文化資源になっていくのです。

本書によって、専門性と汎用性を併せ持った、授業者や学習者の興味関心に共鳴する教育力を持った、過去・現在・未来をつなぐ古典の教材性を問い直すモデルを示すことができれば何よりと考えています。

それぞれの古典教育実践から浮かび上がる、現代に接続可能な古典の世界の多様な魅力や、和本やくずし字が本来持っている教育力Ⅱ教材性を掘り起こし提示していくことで、新しい古典教育への可能性を切り拓くきっかけにできればと考えています（これも面白いなと感じてもらえるような）。

最後に本書を手にとった読者が、自分もやってみたい、自分にもできそうだと実感して、授業実践に役立ててもらえるような、いわば読者に寄り添い続ける書籍となっていることを念願しています。

研究会もまだ続きます。興味のある方の参加もお待ちしております。

なお、本研究はJSPS 科研費20K00326の助成を受けたものです。責任編集者の掲載順は、研究代表者の山田和人を最初にし、加藤直志・加藤弓枝・三宅宏幸については五十音順です。